

[2015/2016] 九州大学附属図書館研究開発室年報表 紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1669723>

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2015/2016, 2016-08. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：



平成 27 年度における研究開発

1 学習・教育支援に関する調査研究

室 員	吉田 素文 (附属図書館副館長, 医学研究院教授)
	石田 栄美 (附属図書館研究開発室准教授)
	山田 政寛 (基幹教育院准教授)
	井上 仁 (情報基盤研究開発センター准教授)
職 員	金子 芙弥 (利用支援課サービス企画係)
	斎藤友利子 (伊都地区図書館企画運営係)
	野原ゆかり (伊都地区図書館利用サービス係)
担当窓口	渡邊由紀子 (利用支援課長)
	田中由紀子 (伊都地区図書館課長)

<研究開発の概要>

九州大学における学習・教育活動と連携した新たな教育支援のあり方について調査研究を行う。

<研究開発の内容>

1. 「大学図書館による自律的学修支援体制の構築」の取り組み (吉田, 石田, 山田, 井上, 職員)

平成27年度「教育の質向上支援プログラム (Enhanced Education Program : EEP)」において, 附属図書館の取り組み「教育の国際化に対応した学修支援環境の構築」が採択された。本取り組みは, 平成27年度から29年度までの3カ年のプロジェクトである。附属図書館がこれまでに構築してきた学修・教育支援体制を継承し, グローバル化の観点から発展させるため, 平成27年度は, 附属図書館, 付設教材開発センター, 統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻が一体となって, 以下の事業を実施した。

1) 国際化拠点図書館の開館に向けた図書館学習サポーター事業の推進

図書館学習サポーター (以下, 「Cuter」と記す。) と図書館職員の協働による学習支援体制を強化するために, これまでの箱崎地区, 伊都地区, 病院地区に加えて, あらたに大橋地区にもCuterを配置し, 活動地区の範囲を拡大した。

また, Cuterの平成24年3月からこれまでの活動状況について, 教育企画委員会, 役員・部局長懇談会, 附属図書館商議委員会で報告を行い, その教育的意義や役割について全学的な認知を図った。その実績が評価され, 平成27年12月1日付で「九州大学ティーチング・アシスタント実施要項」が改正され, 全学生を対象とする授業外学習等の教育支援業務を担うティーチング・アシスタントとしてCuterの教育的位置付けを確立した。これに伴い, Cuterの名称を図書館TA (Cuter) と改めた。

2) 教育の国際化を支えるコンテンツ整備体制の構築

英語の学習用図書の整備体制を検討するため, 農学部国際コース担当教員と連携した選書を試行し, ニーズの把握と課題整理を行った。また, 電子ブックの収集方針及び利用促進の検討のため, 現状の契約タイトル及び利用状況の分析を行うとともに, 利用実態調査として文系教員及び数理学府院生へのヒアリングを実施した。

学生選書の試行として, 本の紹介を通じて日本人学生と留学生の交流を図るイベント「Hon☆Bana」を実施し, その紹介本を基に, 国際交流の促進及び外国語の学習に資する図書を購入した。購入した図書は, 平成28年3月末にオープンした伊都図書館国際交流ラウンジに, 紹介者の紹介文とともに展示した。

3) 教育の国際化に対応した図書館利用教育の拡充

新入留学生を対象とした英語と日本語による図書館ツアーを箱崎・伊都・大橋・筑紫の各地区で実施した。

中央図書館・伊都図書館では、図書館職員に加え、Cuterもツアーコンダクターを務めた。また、中央図書館の後期開催時には、ツアーコンダクターの増員や、iPadでWebサービスのデモンストレーションを行う等、内容の充実を図った。

また、スマートフォンをプラットフォームとした図書館活用スキル習得のためのゲーム教材の新バージョンについて、設計を開始した。

4) 基幹教育支援の拡充

「レポートの書き方講座」を平成27年5-6月および12月に開催した。同講座を開催するにあたっては、Cuterとミーティングを重ね、受講者に練習の機会を提供できるよう添削用レポートを作成する等、内容を拡充した。プレゼン講座も、例年同様、Cuterが模擬プレゼンを披露する構成で平成27年6月に開催した。

新入生の図書館活用スキルの向上を目的として、図書館誘導編、検索編、施設編、レポート編の4つのeラーニング教材（動画）を入学前学習コンテンツとして開発した。また、基幹教育院の教員と連携し、平成27年度に公開した「アクティブ・ラーナーへの第一歩」の利用状況を分析・評価し、その結果を踏まえ、同冊子の平成28年度版の改訂を行った。

5) 学習支援を推進する人材育成

学内外で開催されるシンポジウムや講座等に、本取組担当者及びCuterを派遣し、学習支援に対する意識及び技能の向上を図るとともに、先進的な事例を収集した。また、図書館職員及びCuterを対象に、学外講師を招聘して、研修会「アカデミック・ライティングを考える」を病院キャンパスにて開催した。

2 教材開発および著作権処理に関する調査研究

室 員 岡田 義広（附属図書館付設教材開発センター教授）
吉田 素文（附属図書館副館長，医学研究院教授）
担当窓口 古賀 幸成（図書館企画課専門員）

<研究開発の概要>

インタラクショナルデザインに基づいた教材，教育方法の研究開発と，教材作成にかかる著作権処理問題について調査研究を行う。

<研究開発の内容>

1. 部局と連携した教材開発

・文系地区教員との教材開発に関するミーティング等を実施し，日本史学（宮中儀礼）を3DCGで再現する対話型Web教材を開発するとともに，アニメーションを通じて中国文学（鴻門之会）を学習できるモバイルデバイス用電子教材を開発した。

・基幹教育院，法学研究院と連携し，議論の際の論理の組み立て方を学習するための教育支援システムを開発し，システムの効果測定のための実証実験を行った。結果，15～69歳の男女778名から回答を得ることが出来た。

・医学歴史館，医学研究院との連携及び学生協働により，本学医学部の歴史資料を電子化し，このデータを活用して電子教材を開発した。

・医学研究院との連携及び学生協働により，モバイルデバイスを活用した放射線治療シミュレーション教材を開発した。本教材は，放射線治療時に起こりうる放射線照射位置のずれを未然に防げるようにシミュレーションが出来る教材である。

2. 大学教育の国際化に関わる教材開発

・eラーニングシステム上に公開されている教材の英語化支援を開始し，理系ディシプリン科目「プログラミング演習」の英語化及び電子教材「アクティブ・ラーナーの第一歩」（新入生向け）と「研究の進め方」（2年生以上向け）の英語化を行った。

・基幹教育院との連携及び学生協働により，インフォーマルラーニング向けの英単語学習教材の開発に取り

組んだ。本教材では、スマートフォンのGPSを利用して、位置情報に適した英単語の質問を出題することで、場所と単語を関連させて記憶に残すことを意図したゲーム形式の電子教材になっている。

3. 教材開発に係わるその他の取り組み

- ・福岡市とNPO法人福岡城市民の会と連携して、基幹教育の授業の中で、鴻臚館の観光用モバイルアプリケーションを開発した。また、鴻臚館の3DCGの再現モデルの中を歩き回りながら、平安時代の鴻臚館の様子を体験できるWebアプリケーションを開発し、この成果を2016年1月30日に開催された「福岡城市民の会 第二回市民フォーラム」で発表した。
- ・教材開発センターが導入した2D/3D教材開発システムを使用してICTを積極的に活用した電子教材開発を推進するためのホームページ整備を行い、3Dプリンター、3Dスキャナー、ハイスピードカメラ等の機器を部局に貸し出し、教材開発及び授業や研究等に利活用された。

4. MOOCの開講

平成26年度から教材開発センターが所有する独自のスタジオでMOOCコンテンツ制作に取り組んでおり、平成27年度は、「個人と組織のための最先端サイバーセキュリティ入門」、「Global Social Archaeology: expanded edition」の二つの講座をJMOOCから開講した。

「個人と組織のための最先端サイバーセキュリティ入門」は、岡村耕二教授（サイバーセキュリティセンター センター長）を講師に、新たに制作した3週分の講義をコンテンツとして開講した。開講期間中の受講登録者は589名で、このうち修了者は228名であった。修了率は38.7%となり、これまでJMOOCで開講された講座のなかでも、高い数字となっている。また、本講座の講義は日本語であるが、ビデオには英語字幕を付し、テストも日英併記を行った。その結果、海外からも25カ国34名の受講者が集まった。また、受講後アンケートでは、講座の満足度について「大変満足」の回答が36.7%、「やや満足」の回答が41.3%という結果となった。

「Global Social Archaeology: expanded edition（グローバル社会考古学：増補版）」は、平成26年度に開講した「Global Social Archaeology」に、新たに制作した1週分の講義を増補し、再開講したものである。溝口孝司教授（比較社会文化研究院）、Claire Smith教授（フリンダース大学、九州大学比較社会文化研究院 訪問教授）を講師とする。開講期間中の受講登録者は392名、修了者数は125名であった。本講座は英語での講義に日本語字幕を付しており、海外からは、42カ国127名の受講者が集まった。受講後アンケートでは、講座の満足度について「大変満足」が54%、「やや満足」が37%という結果となっている。

5. 電子教材著作権処理に係る取り組み

録画した講義や学習資料等を電子教材としてウェブで共有したりネット配信するとき、教材に「他人の著作物」が含まれていると、著作権への配慮が必要となる。教員が作成した電子教材の授業利用やネット配信の際の著作権処理の考え方等を共有する目的で、電子教材著作権講習会（全学FD）を開催した。また、大学の学習、教育における電子的学習資源の製作および共有化を促進させる体制の構築と著作物の円滑な利用環境を整備することを目的に、平成26年5月1日に設立された「大学学習資源コンソーシアム（CLR: Consortium for Learning Resources）」（本学代表者は、吉田素文室員）に参加し活動を継続している。

CLRに設置した、活用ガイドラインワーキンググループ（主査：吉田室員）では、高等教育機関における教材作成者の教育・学習活動を支援するためのガイドライン作成へ向けた検討を鋭意進め、「大学学習資源における著作物の活用と著作権」としてまとめて、平成28年4月にCLRホームページより公開した。

3 コンテンツの形成および保存に関する調査研究

室 員	山口 輝臣（人文科学研究院准教授）
	川平 敏文（人文科学研究院准教授）
	中里見 敬（言語文化研究院准教授）
	三輪 宗弘（附属図書館付設記録資料館教授）

	Wolfgang Michel (附属図書館研究開発室特別研究員)
職 員	山根 泰志 (図書館企画課企画係) 原賀可奈子 (資料整備室雑誌情報係) 西 真里恵 (資料整備室雑誌情報係) 相部久美子 (医学図書館閲覧係) 梶原 瑠衣 (医学図書館参考調査係) 島田久美子 (伊都図書館利用サービス係) 吉丸 梓 (文系合同図書室資料サービス係)
担当窓口	久原 明美 (資料整備室長, 図書館専門員) 井ノ上俊哉 (医学図書館専門員) 堀 優子 (利用支援課図書館専門員)

<研究開発の概要>

九州大学が所蔵する貴重資料、コレクション等について、由来や内容、価値等の調査や、画像及び書誌データベース作成等についての調査研究を行うとともに、図書館における資料保存・管理体制等についての調査研究を行う。

<研究開発の内容>

1. 雅俗文庫の公開

平成21年度及び平成22年度に受け入れた中野三敏名誉教授の旧蔵書である「雅俗文庫」について川平敏文室員の指導のもと、人文科学研究院の教員・大学院生とともに、平成27年度も継続して書誌情報の採取・データ入力を実施した。書誌採取の済んだものについては「九大コレクション」で簡易目録を公開している。また、図書館システムへの登録作業を進め、登録の済んだものについては、より詳細な書誌情報、所蔵情報の提供が可能となっている。

平成27年度の開学記念行事・第57回附属図書館貴重文物展示会「雅俗繚乱ー中野三敏 江戸学コレクションの世界ー」においては、図録の制作や展示に関わった。また、中野三敏名誉教授の講演会「江戸文化辻談議ー中野コレクションから見えるもの」が5月16日に開催された。

平成27年度にも追加寄贈の申し出があり、資料の内容確認および受入の準備を行っている。

2. 旧植民地関係資料の整理

大正8年(1919年)に国内で三番目に設置された本学農学部においては、帝国大学期に樺太・朝鮮・台湾に附属演習林を持ち、アジア地域に近接した基幹大学として農学関連の資料収集を行ってきた。これらの資料群の中には旧植民地関係資料の希少価値が高い文献が含まれており、内容も経済、社会、気象、貿易、交通等と多岐に渡っている。

平成26年度に設置した整理に係る専門委員会について、平成27年度は2回開催し、日韓関係史を専門分野とする委員の協力の下、分類を含む整理方法等の検討を行い、朝鮮、樺太関係資料等約800冊の目録データを整備した。

3. 「デジタルギャラリー」の公開

図書館ウェブサイトの電子展示のページと、過去の展示会の情報を集約した、「デジタルギャラリー」を公開した。これにより、最新の貴重文物展示から、戦前の展示会までの情報を一覧できるようになった。また、電子化されている図録や展観目録へより簡単にアクセス可能となった。

4. 濱文庫所蔵唱本目録作成

本研究班では、濱文庫所蔵唱本について詳細な冊子体目録を作成しながら、将来的に電子目録を公開できるよう、フォーマットに則りデータ等を蓄積してきた。その成果は紙媒体以外に、九州大学学術情報リポジトリでも公開し、学内外へ広く発信している。

平成27年度は、これまで紀要等に発表してきた「濱文庫所蔵唱本目録稿」(1~14)を整理・修正のうえ、

前言・凡例・索引・検字表を付して刊行した。以下が完成した目録の書誌である。

中里見敬・戚世雋・中尾友香梨・山根泰志・李麗君『濱文庫所蔵唱本目録』（福岡：花書院，九州大学大学院言語文化研究院FLC叢書11）289頁，2015。

5. 医学図書館関係（青木家文書の調査・電子化，小企画展示「九州大学附属図書館と狩野文庫」）

福岡藩医青木家の文書123点が，福岡市博物館市史編纂室によって調査・電子化された。画像・目録情報は九大コレクション上で公開されている。この文書は，医学史料，中世文書（赤尾家文書）の写，近世文書，詩文等からなり，医学史，中世史，地域史，文学史研究上貴重な資料が含まれている。附属図書館研究開発室員のミヒェル・ヴォルフガング氏の調査により，資料的な価値の高さが明らかとなり，今回の調査・電子化につながった。

思想家・教育者・大蒐書家である狩野亨吉と，眼科学教室初代教授である大西克知の生誕150周年を記念して，眼科学教室旧蔵本の狩野文庫に焦点を当てた小企画展示「九州大学附属図書館と狩野文庫—眼科学教室旧蔵本を中心に」を行った。図書館職員が企画・実施した小規模な展示会であったが，約3週間の期間中，計235名の来場者があった。

6. 「九州大学附属図書館デジタル化画像公開ガイドライン」の作成

古文書等のデジタル化画像を図書館ホームページで公開するにあたっては，資料の掲載情報を踏まえて可否判断を行う必要があるが，判断の指針となるものがこれまで存在しなかった。このため，室員のほか関係部局教員の協力を得て，判断に際し必要な事項を定めたガイドラインおよび実施要領を作成した。

ガイドラインでは，留意すべき掲載情報と目安となる時代区分を記述したほか，必要に応じて学内研究者等に専門的な見地からの助言を求めることができる旨を明記した。実施要領では，可否判断の具体的な手続きや公開に際しての留意点等を記述した。ガイドラインおよび実施要領の作成により，人権やプライバシーに配慮しつつデジタル化画像を公開するための枠組みを整備することができた。

7. 資料保存関係

1) 田嶋記念財団助成金による「カビ被害対策事業」への取り組み

各館室の実務担当者および資料保存班によるチームを組織し，新中央図書館への移転予定である資料を対象として，下記の通り，「キャンパス移転に向けた移転対象資料のカビ被害対策事業」を実施した。

(1) 被害状況調査

対策の検討に先立ち，各館室においてカビ被害状況の確認・調査，カビ被害エリアの温湿度調査を行った。

(2) 対策の検討

(ア) クリーニング処置のための手順と用品等の整備

専門業者によるクリーニング実習を行い，作業の動画撮影を行うとともに，手順や注意点等をまとめた。また，クリーニング作業に必要な機器・用品等の整備として，各館室の書庫の状況等に応じた掃除機を比較検討するとともに，清拭用品やマスク・手袋等の消耗品について複数種類を購入して試用し，使い勝手の比較，必要量や購入費用の試算を行った。

(イ) 被害レベル別物量調査及び対策の検討

移転までの資料クリーニング計画の立案及び必要経費の試算のため，被害レベル別物量調査を実施した。その結果を基に，実現可能性を踏まえ，配架場所別被害レベル別のクリーニング対策案をまとめた。

(3) 対策

(ア) 短期対策

各館室においてまずはクリーニング作業を試行的に実施し，手順を整理するとともに，資料クリーニング計画立案のための作業量の積算を行った。その後，それぞれ優先順位の高いエリアについて，クリーニング作業あるいはくん蒸を実施した。

また，カビ被害を受けている中央図書館の和装本について，帙の交換を行った。

(イ) 保存環境の改善

空気の滞留防止のため，中央図書館と伊都図書館の書庫にサーキュレーターを設置した。また，本助成金以外の経費で，伊都図書館に排水式除湿機2台を増設した。

(ウ) 中長期対策

移転までの資料クリーニングに必要な経費の試算を行い、平成28年度以降の移転準備経費として予算要求を行った。また、作成中の「新中央図書館サービス・業務運用計画」に、移転後の資料メンテナンス及び保存環境管理計画を盛り込むべく、内容を検討した。

2) マイクロ資料の保全対策

マイクロ資料のメンテナンスを継続的に実施するとともに、劣化フィルム572本の複製を実施した。

3) 特殊形態資料の保全対策

地図資料や軸物、リーフレット等の一枚もの資料など特殊形態資料の保全対策として、処置が必要な資料の調査、適切な保存方法及び容器等の検討及び購入を行い、中央図書館分についてはクリーニング及び保存容器への入れ替え作業を実施した。また、記録資料館が所蔵する地図資料についても、保存容器への入れ替え作業を行い、改修により新しく整備された伊都図書館地図室に412箱を移設した。

4 学術情報の流通および発信に関する調査研究

室 員	馬場 謙介	(附属図書館研究開発室准教授)
	畑 晃平	(附属図書館研究開発室准教授)
	廣川佐千男	(情報基盤研究開発センター教授)
	伊東 栄典	(情報基盤研究開発センター准教授)
	富浦 洋一	(システム情報科学研究院教授)
	池田 大輔	(システム情報科学研究院准教授)
	荒木啓二郎	(システム情報科学研究院教授)
担当窓口	大瀧 礼二	(eリソースサービス室長, 図書館専門員)

<研究開発の概要>

九州大学が蓄積する学術情報資源をより効果的に発信するために、発信機能の高度化と検索システムに関する研究開発を行う。

<研究開発の内容>

1. 機関リポジトリを活用した潜在的研究クラスタの創出 (富浦)

機関リポジトリに登録されている研究者の論文を分析し、共同研究の可能性のあるその組織の研究者の対とその根拠を示す第三者の論文とを提示することによって、共同研究を斡旋するコーディネータ (リサーチアドミニストレーター) を支援する研究を進めた。具体的には、author - topic model によるトピック分析の高速化と詳細なトピックによる手法の改善を行った。

2. 汎用的なデータリポジトリについての研究開発 (池田)

様々なデータを分野外の人でも簡単に使えることを目指し、データ流通基盤の概念的なフレームワークを提案する研究プロジェクト (研基盤(B)) を開始した。検索という簡便な手法でフレームワークを個別化し、分野別のリポジトリが得られる点が独創的で、フレームワークは分野を越えた学術情報流通基盤となることが期待できる。

これを達成するために、学術情報流通の基本的な仮説を設定し、これを検証する仮説検証型で研究を進める。仮説にあたる(1)フレームワーク、これを検証するプロトタイプを(2)データと(3)インターフェイスに分け、今年度は(1)データジャーナル等の調査を行い、内包表現を用いたデータの表現に対する準備を行った。また、科学データを扱う国際アライアンスの会合や国内のワークショップに出席するとともに、いくつかの分野の研究者にインタビューを行い、科学データに関する情報収集を行った。(2)超高層大気分野において、e-Scienceの研究を行い、関連したデータを収集し、データベース構築の準備を行った。(3)分担者がそれぞれ保有していた技術について発表、論文執筆を行った。

5 情報専門職の育成に関する調査研究

室員	石田 栄美 (附属図書館研究開発室准教授)
	岡崎 敦 (人文科学研究院教授)
担当窓口	郷原 正好 (図書館企画課長)

<研究開発の概要>

図書館職員の専門性および次世代を担う情報専門職の育成をはかるための調査研究を行う。

<研究開発の内容>

1. 学術講演会の開催

福岡アメリカン・センターと九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻の共催で、平成27年7月22日(水)に、米国シアトルのワシントン大学図書館日本研究司書の田中あずさ氏による学術講演会「サブジェクトライブラリアンへの道程(みち)～A Journey to Become A Subject Librarian～」を開催した。図書館職員23名も参加し、日米の大学教育や図書館の仕組みの違いや、今後の図書館員に求められる資質や能力について把握した。

平成27年8月3日(月)に、千葉大学副学長兼附属図書館長、アカデミック・リンク・センター長の竹内比呂也氏による学術講演会「大学図書館の将来」を開催した。図書館職員22名も参加し、これからの大学図書館あるいは大学図書館員がどのような役割を果たしていくのかについて考える機会となった。

平成27年12月15日(火)に、附属図書館研究開発室訪問研究員で、日本女子大学准教授の大谷康晴氏による学術講演会「図書館における資料選択—2015年のトピックから—」を開催した。図書館職員20名も参加し、今後の図書館の資料選択のあり方について把握した。

2. 附属図書館研究開発室活動報告会の開催

平成28年1月27日(水)に、附属図書館研究開発室活動発表会を開催し、7名の室員が活動内容を発表した。図書館職員27名も参加し、各研究開発事項について理解を深めた。

6 新たなサービスの創出に関する調査研究

室員	石田 栄美 (附属図書館研究開発室准教授)
	馬場 謙介 (附属図書館研究開発室准教授)
	畑埜 晃平 (附属図書館研究開発室准教授)
	藤崎 清孝 (システム情報科学研究院准教授)
	松原 孝俊 (韓国研究センター教授)
	南 俊朗 (附属図書館研究開発室特別研究員, 九州情報大学教授)
担当窓口	郷原 正好 (図書館企画課長)
	渡邊由紀子 (利用支援課長)

<研究開発の概要>

図書館利用状況の分析や国内外図書館の視察等にもとづき、新たなサービスの創出に関する調査研究を行う。

<研究開発の内容>

1. 海外の大学図書館との連携, 訪問調査(石田, 畑埜)

デジタルアーカイブやオープンデータの最新の動向, 及び運用面での体制や課題などについて調査するた

め、ハーバード大学the Berkman Center, イリノイ大学図書館情報学科・大学図書館, カリフォルニアデジタルライブラリ, UCバークレイ図書館への訪問及び調査を行った。

2. 図書館利用状況の分析（石田，渡邊）

平成 25 年度，平成 26 年度の中央図書館，伊都図書館の入館・貸出データをもとに，大学生の図書館利用について分析を行ない，他大学図書館の利用状況と比較した。